

2016年7月26日



第66号

## 三里塚50年 地球の課題の実験村と 「農的価値」

7月17日（日曜日）東京で「三里塚闘争50年の集い」が開かれ、空港反対同盟関係者、支援に携わったことのある人々など150名余の参加がありました。1966年7月4日に、ときの佐藤政府が突如空港の建設予定地を成田市三里塚と閣議決定して50年になることからこの日の集いとなったものです。反対同盟の代表世話人で地球の課題の実験村共同代表でもある柳川秀夫やながわひでおさんは挨拶で、便利さの追及が成田空港を必要としたが、現代文明の特徴であるあくなき便利さの追及がいまや地球の生命系の存続すら脅かすようになってきていると、警鐘を鳴らしました。そして、“腹八分で生きること”の意味、もう一つのものさしである「農的価値」の重要性を語りました。

「地球の課題の実験村」は、「成田空港問題円卓会議」の中で柳川さんたち三里塚の農民が提起したものです。当時成田空港の2期工事（平行滑走路）は行われておらず、円卓会議に先立つ「空港問題シンポジウム」で、国が建設を強行したことを謝罪した点を踏まえれば、空港2期用地には滑走路ではなく、地球の・人類的課題を考え克服する手立てを实践する場を作るのがふさわしい、との提案でした。（※1）

この提案でのキーワードが「農的価値」でした。農の営みが持つ、循環性と持続性に価値を見ようとするものです。

柳川さんたち三里塚農民は空港反対闘争をしながら有機農業に打ち込み、土と農への思索を深めました。農民は土に働きかけて作物を育て暮らしを支えます。太陽のエネルギー、水と大

気の循環、土壌中の微生物の働き、こうしためぐりの中に身を置き、めぐりに加わることで自らの生を保ちます。有用物はいただき、余りは自然に返しますが、それも分解されてめぐりに入っていく。この限りで人は自然を汚染せず、ずっと生きてゆけるのです。この限りのことを柳川さんは“腹八分で生きる”と表現します。（※2）

この提案は円卓会議を主宰した隅谷調査団・参加者から評価を受け、運輸省の中に「地球の課題の実験村構想具体化検討委員会」が設置され、3年余り検討されました。座長は隅谷調査団の宇沢弘文教授、反対同盟から柳川秀夫、石井恒司、三ノ宮廣すみやひろしほか、運輸省、空港公団、千葉県からも委員が出て議論されました。

議論の成果は「若い世代へー農の世界から地球の未来を考える」（1998年5月）という報告書にまとめられますが、この間にも運輸省は2期用地には滑走路を造りたいとし、「実験村」という農民側との考えは一致しませんでした。結局並行滑走路の建設が強行され、その地での実験村の実現はありませんでしたが、提案の趣旨に賛同した農民・市民が集まり、今日に至る実験村の活動となりました。（1998年～）

周りを見回すとTPP暫定合意や原発の再稼働など、便利さの追及が人々の暮らしを追い詰め、環境を破壊する方向が強まっています。三里塚闘争が50年を迎えたのを機会に、「農的価値」の意味を今一度考えてみたいものです。

（実験村村民 平野靖識）

- ※1 「見孫のために自由を律すー農的価値の回復を」（空港反対同盟1994年）
- ※2 『生命めぐる大地』（地球の課題の実験村2000年）



発言する柳川共同代表

# 木の根ペンション 改修工事

「赤い屋根、白い壁、時計台のあるペンション風の建物」＝木の根ペンションの落成式は、1989年の7月9日に行われましたから、今から27年前ということになります。



その前身となった「木の根<sup>きのね</sup>団結小屋」は、成田空港建設予定地：横風用滑走路予定地のど真ん中に、空港建設反対運動の拠点として反対同盟によって作られた2番目の団結小屋でした。今はもう亡くなった小川源<sup>おがわげん</sup>さんの木の根部落の畑の隅に建てられていて、この時すでに建設から23年が経過していました。

その団結小屋をペンション風の建物に改築しようという話が持ち上がったのには、いくつかの取り巻く状況の変化、時代の変化があったと思います。一方で成田新法や第3次強制収用（代執行）の動きなどがあり、もう一方で、東峰<sup>とうほう</sup>十字路裁判が一応の決着を見たり、空港反対同盟、運輸省・空港公団、関係自治体などによる成田空港問題シンポジウムなどによる話し合い解決の模索など、時代の転換点とも言える状況にありました。

30年近くも前の話で、記憶も曖昧になっているので、当時私たちも編集・発行に関わった写真雑誌『フォトニュース ひろば』に掲載された落成記念の座談会の記事を読み返しながら、これを書いています。

団結小屋の周囲に張り巡らされていたバリケードを撤去することを含め、ペンション風の建物に改築することを提唱したのは、現実験村共同代表の柳川秀夫さんで、「赤い屋根、白い壁、時計台」のイメージは当時木の根部落住民の小川篤子<sup>あつこ</sup>さんで、普通の人が、誰でも立ち寄れる開かれた場所を目指しました。

なお、現在の木の根ペンションは、改築当時の場所から西へ100mほど移動した一坪共有地に建っていて、老朽化はしましたが、当時改築に関わった多くの人たちが望んだ姿で、誰にでも開かれた場所のまま、現在に至っています。

（荒川住民ひろば：吉沢公良）

はじめまして。現在木の根ペンションでお世話になっております、中山潤、34歳です。

2年前に東京からこの地に来て今は趣味のスポーツ競技を活かしたアスリート農家として年明けの独立にむけて日々農業研修に邁進しております。

私がこのペンションと出会ったのは2年前。見た瞬間、おもしろい！

そうなのです。この想いの通り、元々私は、様々なジャンル、世代の人たちとの交流をこういった場所でやりたいと思っておりました。正直、歴史的・政治的な問題は無知に近く、いろいろな方の話を聞くたびに「そんなことが！なるほどなあ」の連続でした。この場所の存在意義も大事ですが、入り口として私はただ単純にこの場所で楽しんで興味をもってもらいたい、そこから考えることがあればそれでいいと思っています。

最近では地元東京から友人を招いて農作業・収穫を行い、ペンションや畑でBBQ・飲み会というのが人気コースになっております。そしてそこから始まったのが友人との「野外音楽フェスin木の根」でした。

去年に続き今年も2日間にわたってお客さん、ゲスト、スタッフも合わせ300人以上の人がここに集い、ネット上でも賑わい2016年の夏のひとつの思い出として皆の心に刻まれたのではないのでしょうか。



このペンションがいつまで存続されるか分かりません。しかし、少なくともこの地に足を踏み入れた人の多くは、「またここに来たい」という気持ちをもってくれたと実感しております。「継続」このチカラがなにより大事です。今回の改修工事でも現住人としてとても感謝の気持ちでいっぱいです。私の中ではこの木の根物語は始まったばかりです。まだまだ走り続けますのでみなさま、どうぞ宜しくお願い致します。

# 木の根ペンション大改修！！ ご支援お願いします

## ●屋根と壁を全面修理します

このまえの冬、成田空港のど真ん中に建つ宿泊研修施設、木の根ペンション二階軒裏の板が少し剥がれ落ちてしまいました。仲間の大工さんに見てもらったところ、屋根がいたんで水が浸みこみまわって腐り落ちたとのこと。屋根や壁のどこから水が浸みているかわからないが、直すのなら、2階建ての屋根や壁の全部を張りかえるしかない。費用は足場組みも含めて、100万円を越すかもしれないとのことでした。所有者の反対同盟と維持管理をまかされている地球的課題の実験村とで相談し、両方で費用を折半することとし、改修をお願いいたしました。

## ●柱や梁、土台の補強も必要でした

木の根ペンションは、空港予定地内に初めて建てられた団結小屋を増改築し、皆に開かれた宿泊施設、赤い屋根白い壁のペンションとして生まれ変わったのが1989年夏のことでした。2000年夏に、百数十メートル曳き家して現在の場所に移りました。また2012年夏、1階西側の屋根などを50万円ほどで修理し、その上に太陽光パネルをすえつけました。

2階屋根まで届く足場ができ、5月13日から修復工事が始まりました。しかし、壁をはがしてみると、「まあ、たいへん」。特に玄関の側、東側の壁は中の柱や梁、土台まで腐ってぼろぼろになっていました。屋根や壁を張り替えるだけでなく、これらをそれぞれ補強しなければならぬのです。他にも、西側のトイレ付近の壁も雨が浸みこんでいそうです。予想より大幅に費用がかさむこととなりますがやむをえません。補強を含めて全面改修をお願いしました。

## ●現在と未来の世代、皆と共に生きる場としてペンションの存続を

木の根ペンションは現在、反対同盟や一坪共有者たち、実験村の運動や会合のほか、多くの人々が多種多様な使い方をしています。10年前からは、周辺地域で農業研修をする若者たちの寄宿先となり、もう10人近く就農・自立し、現在も2人が寄宿しています。また、その若者たちを中心にライブイベントも毎年のように催されています。今年も海の日、夏の日とイベントが予定されています。生命と地域にかかわる市民学習会「めだか大学」もここから始まりました。また、NGOなど海外ボランティアにでかけるメンバーが数日間、農業研修に利用し、帰国後、成果を報告していきます。世界各地の農民・市民・学者・ジャーナリストなどが、日本農業や民衆運動の視察・交流拠点として利用しています。ペンションは時代、世界の人々と共にあります。

空港が成田にあることが当たり前の若者たちも、誘導路に囲まれターミナルビルの直近にペンションがあることに驚き、古い写真や壁の素焼き板の言葉に見入り、木々の緑やプールがおりなす不思議な開放感を楽しんでいるようです。新東京国際空港が成田に位置決定されて今年で50年、成田空港問題の歴史を語り、現在と未来の世代すべての人々に開かれた場として、グローバルな世界での人々と地域のつながり、空港や国のありようを共に考えつくる生きた場として、木の根ペンションを末永く存続させたいと考えています。そのための大改修です。

## 皆様のご支援ご協力を心よりお願いいたします。

三里塚芝山連合空港反対同盟・地球的課題の実験村

郵便振替口座 00140-3-92555 口座名 地球的課題の実験村

# T P P 座談会 i n 上越

天明伸浩（星の谷ファーム）

こんにちは。私は47歳の新潟の百姓です。1995年に大学院を修了すると同時に、米作りがしたいと新潟の山奥に移り住みました。今では水稲5町、ブルーベリー3反とその農産加工、自給野菜を作っています。一緒に移り住んだ妻と娘3人で暮らしています。私の住んでいる地域は冬には3メートルほどの雪が降り積もり、過疎高齢化が進んでいます。

そんな私が住んでいる新潟県上越市の川谷集落で「T P P 座談会 i n 上越」を6月22、23日に開催しました。東京から農政ジャーナリスト、N P Oの方や、山形県小国町、千葉県成田市の農民、それに地元上越の農民など30名近くが集まって、T P Pで地域がどうなるか話し合いました。

私は2010年12月に全国の農民が集まって立ち上げた「T P Pに反対する人々の運動」共同代表なのですが、会議はいつも東京です。これまでは交渉についての話が多く政府の動きはどうだ、アメリカの動向はどうなどと空中戦の話が多かったです。T P Pの問題は地方に大きな影響があるにも関わらず、どうしても地域からの視点は欠けてしまいがち。地に足を着けて暮らしている場所に向いて話をしようと、山村集落の川谷に集まりました。

新潟からは「新潟コシヒカリは全国のトップブランド」ともてはやされたのは過去の話で、米の生産額は減少し、経営を考えると飼料米などにシフトしているが、政策はいつ変わるかわからないので不安との報告。自分の住む集落の各戸を分析して見ていると跡継ぎがない「赤信号」が灯った家が多くて、地域の農地を守るのは誰なの？などと赤裸々な発言が相次ぎました。

また農民にとっては、農業以外の問題点が隠されているのが大いに不満だとの声も相次ぎました。今でも大手マスコミから流れてくる情報は、農業の影響ばかり。でもT P Pで話し合われている分野は21にわたります。医療、金融、食品表示など、農家だけに影響がとどまりません。多くの人々の「暮らし」が大きく変わります。T P Pで儲かりそうなどと思っている勝ち組農家にとっても、暮らしへの影響は無視できません。農業が残っても人々の暮らしが壊されれば、社会環境は悪化して行きます。

T P Pのひな形と言われる北米自由貿易協定を結んだメキシコを訪ねた時には、協定によって労働者や学生など人々の暮らしが破壊され「自分たちは自由な奴隷」だとの発言まで聞かされました。

T P Pのような自由競争一辺倒の考え方では、私が住んでいる生活条件の厳しい山村集落は維持することが難しくなります。人々の暮らしを守るために、何を大切にして、どんな地域を作っていくのかじっくりと考える必要があります。

2日目には私の住む地域で立ち上げた「川谷もよりの将来をみんなで考える会」の事務局に寄って、その取り組みについて話しました。

5年前に組織を立ち上げ活動しています。かつては100戸以上あり、小中学校まであった地区ですが現在は24戸です。

地区から出て行かれた人たちとの交流を復活させたり、地域おこし協力隊を募集して活動してもらったりと、地区全員参加でこの地区を盛り上げようと活動しています。去年は地域を残していくためにどうしたらいいかとの話し合いがもたれて、「地域ビジョン」を作成しました。

誰もが暮らせる地域づくりを目指して、視察先に、障がい者と健常者が一緒に農作業して暮らしている信州共同学舎を入れたりなどと、普通の地域おこしとは違った視点からの取り組みもあります。

今回のT P P座談会は、日本の中でも状況が厳しい山村集落での話し合いでした。地域の実情を見てもらながら、野良で日々暮らしている人たちの中からT P Pの対抗軸を作っていく機会になれば幸いです。都会からのスマートなT P P反対ではなく、日々汗を流している場所での話し合いをさらに出来れば、T P Pへの対抗軸がはっきりと見えてくるのではないのでしょうか。



# T P P “早期批准＝後悔先に立たず” とさせてはならない！

環太平洋戦略的経済連携協定

T P Pに反対する人々の運動 近藤康男

## ●急いでいるのは日米両政府だけ

安倍晋三首相の口癖は「再交渉には応じないためにも早期批准が必要だ」。また、海外のT P P関係筋からも「日本が率先して他国の批准の流れを主導し、米国に圧力を掛けるべきだ」との声も聞こえる。

しかし、米大統領選の候補者のトランプ氏は「T P Pからの離脱」、クリントン氏も「再交渉」とトーンを強めている。そしてそれを意識してかどうか、各国での批准、国内法整備に向けた動きは遅々とした歩みを続けている。カナダ・ニュージーランド・オーストラリア・豪州は公聴会などの手続きを先行させ、年内承認をめざしているのはNZと豪州だ。マレーシア・ベトナムなどはT P P基準に追い付いていない国内法や体制整備に力を注いでおり、多くは来年半ばの承認を見ている。急いでいるのは日米両政府だけと言える。

そして、英国のEU離脱による混乱は、T P Pと並んで新たな世界基準をめざすものとしての米・EU間の環大西洋貿易投資パートナーシップ、また、日・EU間の経済連携協定の年内妥結の予定を大きく遅らせるだろう。これは、間接的にT P Pの米国内手続きにも大きく影響する筈だ。

米国政府は、「再交渉はT P Pを漂流させかねない。協定の運用で果実を取り、将来の自由貿易協定での条文化を実現する」という方針で議会の説得に努めている。“将来”にはT T I P、サービス貿易の一般協定、そしてT P Pと東アジア地域包括的経済連携、アジア太平洋自由貿易圏が含まれる。

しかし、新大統領が就任後に前言を翻すだろうか？ クリントン氏なら、前政権の顔を立てつつ、運用面での果実を自らの手柄にすることもあり得よう。しかし、11ヶ国相手の交渉は時間と混乱とを覚悟せざるを得ず、内容次第では国内手続きのやり直しも必要になる。

日本政府は各国の状況を慎重に見極め、国会審議と市民への説明に時間を掛けるべきだろう。新大統領の就任は1月20日で、時間はある。

## ●アメリカの先行きは見えない

民主党は党綱領起草委員会で、サンダース氏の「T P P承認の採決阻止」という提案を否決、オバマ大統領にとっては、かろうじて議会承認の可能性を残した形となった。

共和党も、党主流派とトランプ氏の妥協で党綱領に「再交渉でよりよい条件の協定を結ぶ」とした。マコネル上院院内総務、ライアン下院議長、ハッチ上院財政委員長などは、業界を背景に協定の修正を要求している。これら議会の主要メンバーが反対しているのは、

生物製剤の新薬データ保護期間の12年が確保されていないこと、金融分野の電子データ保管場所の自由が確保されていないことその他、通貨操作、タバコ表示に対する紛争解決条項適用除外、原産地規則、乳製品・豚肉貿易などだ。オバマ大統領などは説得に動いているが、了解を得るには至っていない。

現在、米国通商代表部では、議会に提案する文書の準備に入っている。5月に国際貿易委員会の「T P P影響評価報告書」、6月に「各国のT P P実行体制の状況報告」が公表・提出されている。今後、協定と協定実施法案の議会審議開始のためには「T P P協定の正文写し」、「協定実施のために政府がすべき事項についての声明」、「T P P実施・発効のための計画」に加えて、上院財政委員会と下院歳入委員会に対して、米国の雇用に与える影響、米国及び協定参加国の労働者の権利や環境に与える影響などを詳細に説明する3種類の報告を提出しなければならない。

日本では、今春以降、多くの団体が参加するネットワークとして「T P P批准阻止！ アクション実行委員会」が、国会内外での闘いを呼び掛けてきた。海外でも豪州、米国、NZをはじめ、各国で市民・農民が秋に向けての運動に取り組んでいる。各国で批准が先送りとなれば、漂流、破綻もあり得る状況だ。日本でも秋からの闘いに負ける訳にはいかない！

日、米、ペルー、チリ以外のT P P審議見通し

国	進捗	備考
NZ	実施法案審議開始⇒年内成立を目指す	議会批准不要
メキシコ	4月に協定文と付属文書を上院に提出	
マレーシア	17年前半にも国内法修正を、年央に完了	批准不要 署名前に議会で承認済み
ブルネイ	17年春に批准	議会批准不要
ベトナム	7月国会に国内法改正案提出	議会批准不要
豪州	選挙結果僅差の勝負で公聴会・審議慎重に	議会批准不要 再交渉拒否
カナダ	国民の意見を聴取中、慎重に進める	議会批准不要
シンガポール	特に急ぐつもりはない	議会批准不要

※豪州は7月2日上下院選挙で下院は僅差で与党勝利、上院未集約、今後審議・公聴会に遅れも。労働党は既締結のFTAでのISDS条項の見直し要求

自由貿易協定

# 2016年度の年次寄り合いの報告

## 成田空港の現状と実験村の理念

### ● 雨天による寄り合い会場の変更

「新東京国際空港」の建設予定地を成田市三里塚と隣接する芝山町に決めた1966年（昭和41年）の閣議決定からちょうど50年目を迎えた今年の実験村の年次寄り合いが、4月17日に開催されました。

会場は恒例の「夕立の森」を予定していましたが、あいにくの雨模様のため、急遽、木の根ペンションに会場を変更しての開催になりました。4月の中旬は例年、雨の降る日が少ないのですが、今年は波乱含みなのでしょうか。

### ● 「閣議決定50年」の問題提起

年次寄り合いでは「閣議決定50年」という節目の年を踏まえて、「2016年度年次寄り合いを迎えるにあたって」という事務局からの問題提起があり、そこでは91年11月から93年5月まで15回にわたって開かれた隅谷調査団主宰の「成田空港問題シンポジウム」の経緯や、それにつづいて12回開催された「成田空港問題円卓会議」を振り返り、「円卓会議」の最後に示された「隅谷調査団の所見」に「円卓会議で提案のあった『地球的課題の実験村』の構想については、その意義を高く評価する。国は運輸省に検討委員会を設けて、すみやかに具体化のための検討を開始すること」との一項が盛り込まれ、これが現在の実験村への道を開くことになった経緯などが改めて確認されました。

しかし他方では「地域振興による空港と地域の共生」という大義名分の下で、新たな空港拡張計画も進行しつつあります。昨年5月、かつては空港反対運動を担った人々が「成田第3滑走路を実現する有志の会」の設立に動き出し、11月には非公開で開催された「成田空港に関する四者協議会」に「第3滑走路」建設に関する具体案が提案されたことも明らかにされました。

### ● 「実験村」の意義を改めて考える

「農業と農地を開発の犠牲に供す」といった誤った考え方に基づく空港建設計画を批判した「農的価値」や「<sup>じそん</sup>児孫のために自由を律す」という理念は、「実験村」構想が立脚する大切なものです。原発事故の酷さを見るまでもなくそれは今も、いやこれからますます有意義で大切な理念になるだろうと思います。

しかし他方で空港周辺の営農基盤は衰弱しつづき、「第3滑走路」予定地内の27戸からは「滑走路建設反対」の声が上がらない現実もあります。そんな厳しい現実に向き合い、実験村の村民である私たちに何ができるのかを考えながら、可能な実践を模索していきたいと思います。

### ● 夕立の森：あずまやの再建をめざす

実験村が始まったときからの企画である「夕立の森」は、担当の平野さんの尽力で毎年、年次寄り合いの会場にもなってきました（今年は残念ながら別会場でしたが・・・）が、最初に作った施設の傷みがすすんでおり、その修復なども手がけてみようかと考えています。

その手始めとして「あずまやの再建」を試みようということになりました。

### ● 大豆・麦トラスト：農とかかわるイベントを

昨年度の麦トラストは、台風による麦の倒伏で散々でしたが、手作業での緊急麦刈りなんかも「農とかかわるイベント」にして村民の皆さんに「救援の参加」を呼びかけるなど、もう少し手立てを考えて見ようということにしました。トラスト大豆を使った「味噌づくり」も、イベント化して村民の皆さんに参加してもらえるようになっていけばいいな、と考えています。

2016年7月【実験村事務局長・佐々木希一】

# さつま大長れいし

「れいし」って何のことかすぐに判るひとは、ほとんどが青果売買の関係者だと思う。なぜなら農学と園芸学で「蔓荔枝=つるれいし」というウリの一種が、和名では「苦瓜=にがうり」と呼ばれることを知っている人なんて、実験村の村民にだってそんなには居ないと思うからだ。だからわたしがこれを知ったときは、「へー、ゴーヤのこと“れいし”って言うんだ!」と、なぜか少し得をした気分になった。

我が家の狭い庭にゴーヤが実るようになってから、5~6年が経つ。大きいモノだと長さ25センチ以上、胴回りも10センチ以上の実が毎年30本は収穫できる。おかげで我が家ではゴーヤのレシピが飛躍的に増え、夏場料理の定番になった。でも「れいし」とか「にがうり」とか「ゴーヤ」と呼ばれる野菜にもたくさんの種類があり、「ゴーヤ」が「にがうり」の“琉球語”で、表面のデコボコした形状が「ライチ」の実に似ているから「れいし」の呼び名が付いたなんてことは、当然ながら知らなかった。

それが今年、「さつまゴーヤ」なる珍しい名前に惹かれて苗木を買い求めて栽培したら、今までとはまったく違う形の実が出来た。【写真参照】そこで「さつまゴーヤ」をネットで検索すると、なんと、表題の「さつま大長れいし」が、種苗のネット販売ページを中心にどどっと表示されたのには驚いた。ちなみに「大長」は「おおなが」と読み、我が家のゴーヤが「島さんご



れいし」って種類だったことも判明した。

ところがつい10年ほど前まで、流通量の少ない「にがうり」は東京中央卸売市場では統計の対象外だったという。それが冬瓜(とうがん)やオクラを凌ぐメジャー野菜になった背景には、いわゆる沖縄ブームがあった。今では、首都圏ならほとんどのスーパーで、「にがうり」ではなく「ゴーヤ」の名前で、大抵は「太れいし」という主流品種の「蔓荔枝」を買うことができる。

考えてみればこれは、ちょっとした食文化の様変わりである。わずか10年で、沖縄、九州、四国など、日本の西南暖地の限られた地域で食されていた食材が首都圏の青果市場を席卷するなんてことは、そうあることではないだろう。しかも、チャンプルという一地方の郷土料理を介してゴーヤが「全国化した」ことに、なにか沖縄の郷土料理の、そしてゴーヤという西南暖地の食材のパワーを感じてしまうのだ。

(ささき・きいち)

## ~村民になってください~

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身のくらしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切に作る“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

○村民費 3000円 ○麦大豆畑トラスト 5000円  
○通信購読のみ 1000円

郵便振替 00140-3-92555 地球的課題の実験村

<問い合わせ>

電話/FAX: 0476 (26) 1654 平野

メール: jikken-mura@jcom.home.ne.jp

URL: <http://members2.jcom.home.ne.jp/jikken-mura/>

## ✉ 村民からの手紙 ✉

久しぶりに、「地球的課題の実験村」関係の資料を読み返してみた。そして、実験村のスタート時の寄り合いで、「実験村開放自由学校」を提案しているのを思い出した。「自然と触れ合うことによって、私たちは自然大好き、不思議大好きを育み、感受性の豊かな人間性を育む場を作りたい。」「自然、景観、文化、歴史を調査し、保護し、継承し、育成していく場を作る。」「地域住民に開放された自由学校を創造する。」

「マッピング」と名付けた活動を構想している。マッピングとは、「遊びながら、学ぶ。学びながら、遊ぶ。そういう野外の、体験する、学びの〈場〉を創る。学校という、教室という閉鎖空間から、町の中へ、海や山へ、田んぼや畑へ。歩きながら、学習する」という活動である。恒常的な、通年的なカリキュラムではなく、一時的な、イベント的な学びの〈場〉を創出するものである。

学ぶことは楽しいことである。私たち人間は学び続けていく動物である。見る、聞く、嗅ぐ、触る、食べる、などなど。五感を活性化し、頭脳も活性化する。そういう全身心を活性化する学びを体験する。そして、助け合う、教えあう、



協力する、コミュニケーションすることを学ぶ。学ぶ力とは生きる力だ。それは人間力である。「マッピング」とは人間力を練成するものである。年2回くらいは、企画し、実行していきたいと考えている。

また、ホームページ『地球展望台』に、ホームスクール（ホームエジュケーション）と自立学習、自由研究を支援するページを作っている。まだまだ内容は不十分だが、その名前を「実験村発開放自由学校準備室」にしている。とりあえずは、HP上<sup>ホームページ</sup>に、「地球的課題の実験村」の学校を作ろうと思っている。

根本行雄

地球展望台のアドレス

<http://homepage3.nifty.com/AIYK019/>

オ

### 「村民からの手紙」 大募集です。

村民の近況、お知らせ、提案などなど、村民のみなさんからの手紙を募集中です。

現地の企画や行事になかなか参加できない村民のみなさんも、手紙でいろんなことを知らせて下さい。

#### 【手紙の送り先】

〒286-0046 千葉県成田市飯仲297-4  
平野 靖識

#### 【編集後記】

初めての重大失態です。実験村通信の1頁目は「百姓百生」と決まっていた、毎号わが村民か実験村縁の人々の「生きざま」が掲載されてきたのですが、今回は完全な事務局のミスで「柳川代表の集会発言」で代替です。でもチョッとだけ“喜んで”います。最近はなかなか表舞台に姿を見せない共同代表の久々の「柳川節」<sup>ぶし</sup>を、紙上に採録できたからです。“腹八分目”って、心地よい響きですね。

(佐々木希一)

■編集・発行／2016年7月26日「地球的課題の実験村」  
■購読料／年間1,000円（年3回）

■66号編集担当／佐々木希一・平野靖識  
■共同代表／柳川秀夫 千葉県山武郡芝山町香山新田22  
大野和興 埼玉県秩父市大宮5734-4